

# 汎神論論争とドイツ観念論の間<sup>1)</sup>

——ハーマンのヤコービ宛書簡に見るスピノザ主義——

平尾昌宏

Spinozism in "Sturm und Drang" age  
— based on correspondence between Hamann and Jacobi

HIRAO Masahiro

## Abstract

Hamann is distinguished from some thinkers in his generation of "Sturm und Drang", such as Goethe and Herder. It is obvious that he was not a spinozist, indeed, Spinoza was a deadly foe for Hamann. Hamann wrote no book on Spinoza, however, he expressed his sentiment about Spinoza in his letters to Jacobi during Pantheism Controversy. They show us one of the most interesting examples of reactions against Spinozism in those days.

Hamann honestly admits the difficulty of reading Spinoza's "Ethics". He challenges and challenges Spinoza and Jacobi's "Spinoza-letters", but they repel him. Spinoza's style and method in "Ethics" turndown Hamann. They are considered obvious trickeries for Hamann. Indeed we can not say that this kind of sentiment in Hamann's letters to Jacobi is "philosophical" statement, but, at the same time, it is nothing but expression of his own "philosophy".

At first, for Hamann, Spinoza's philosophy is a false construction because it is a system and every system is rootless. Hamann says that everything is local and individual, and arises from "History". Secondly, the form of "Ethics" is a sign of "Purism of Reason", which

---

平成22年6月30日 原稿受理

大阪産業大学 教養部 非常勤講師

1) 本稿は、平尾[2004], [2006], [2007], [2009], [近刊]に繋がる一連のスピノザ主義史研究の一環である。

is applied to the philosophy of Kant by Hamann in his "Metakritik". In this sense, Spinozism and Kantianism are both his targets.

The next generation, like Schelling and Hegel, belongs to a kind of Spinozist and tries to integrate the realism of Spinoza and the idealism of Fichte. They think within the framework of <Spinoza and Fichte>. But the framework of <Spinoza and Kant> appears only in Hamann (and Maimon).

It goes without saying that Jacobi was a bitter critic of Spinozism. But he formed an estimate of its charm. Spinozism as a system was typical of all philosophical systems for Jacobi. Therefore he made a strong influence on German idealists, whose model was Spinoza's system of philosophy. On the contrary, Hamann did not have any respects to Spinoza. Therefore Hamann's criticism on Spinoza had no influences. This absence of influence over German idealists is a very result of Hamann's own thought of uniqueness, and also belongs to one scene in the history of Spinozism in Germany.

## 概要

汎神論論争の立役者ヤコービとは違って、ハーマンにはスピノザに関する著作はない。しかし、汎神論論争の時期を通じてハーマンは、ヤコービと頻繁な書簡のやり取りをしており、そこではスピノザについての彼の考えが述べられている。ある種のスピノザ主義者と言ってよいゲーテやヘルダーとは異なって、ハーマンは明らかにスピノザ主義者でなく、それどころかスピノザは彼にとって敵でしかない。しかし、この往復書簡は、この時代のスピノザ主義の歴史にとって興味深い一資料となっている。

ハーマンはスピノザの『エチカ』とヤコービの『スピノザ書簡』とに何度も立ち向かっているが、その都度撥ね除けられる。その最も大きな理由は、『エチカ』の内容もさることながら、その幾何学的形式にある。この形式に表現されているような体系性は、「あらゆるものはローカルであり個別的である」と考え、歴史を重視するハーマンにとっては根の無い空虚なものに過ぎないのである。したがって、スピノザ哲学とはハーマンにとって、「理性の純粹主義」の現れである。「理性の純粹主義」とは、ハーマンが名高いカントへの「メタ批判」において用いた考えであったが、その意味では、ハーマンにとってスピノザ主義はカント哲学と同じ境位にあることになる。シェリングやヘーゲルといった後の世代では<スピノザとフィヒテ>が彼らの思考の枠組みとなるが、ハーマンは<スピノザとカント>を思考の枠組みとしており、この時代のスピノザ主義の捉え方の一典型を示すものと考

えることができる。

ハーマンと書簡のやり取りをしたヤコービもまたスピノザ批判者である。しかし、スピノザ体系をあらゆる哲学体系の典型として重視するヤコービは、それゆえスピノザ主義を非常に高く評価する。そのことが後の世代に対する影響の源である。だが、ハーマンはスピノザに関する著作も書かず、また、スピノザへの敬意もない。そのため彼はこの点での影響力を持たなかったのである。

## 前書き

スピノザ主義を論じる場合、多くの論者がそうであるように、われわれはどうしてもスピノザを高く評価した哲学者、「スピノザ主義者」と呼び得るような思想家に注目しがちである。例えばその代表がゲーテであり、ヘルダーである。彼らについてはかなりの研究の蓄積がある。しかし、スピノザ主義の歴史はそうした人々だけによって成立するのではない。ヘルダー、ゲーテの同時代人ではあるが、決して「スピノザ主義者」と呼び得ない事例、スピノザ受容に関しては彼らの裏面とも言える場合をハーマンに見てみよう<sup>2)</sup>。

いわゆる「スピノザ・ルネッサンス」を招いた汎神論論争の、一方の立て役者たるヤコービは、特にハーマン晩年の盟友とでも言うべき存在であった<sup>3)</sup>。汎神論論争の時期、ハーマンもヤコービの『スピノザ書簡』とともにスピノザを読んでいる。しかし、1784年12月14日付けのヤコービ宛書簡や1785年2月6日付けのヘルダー宛書簡によれば、ハーマンはこの時点を遡ること20年前からスピノザを読んでいたことが証言されている。だとすれば、1760年代半ばには、既にスピノザに触れていたことになる。実際、1763年(3月4日付け)のニコライ宛て書簡には「紡ぎやその崇拜者スピノザには幾何学的建築様式は自然なのだろうか。われわれは全て体系家でありうるのだろうか」(HaB, II, 197<sup>4)</sup>)とあり、この時点で既にスピノザに触れていた、ないしはスピノザについて知識を持っていたことだけは確かなようである。ただ、早くからスピノザを知っていたとしても、その影響ないし刺激がどの程度であったかを問うのは困難である。ハーマンにはスピノザについてのまとまっ

- 
- 2) ハーマンの思想については、先行諸研究に大いに助けられた。紙幅の都合で割愛したものの、特に論文では奥波一秀、常葉謙二、川中子義勝各氏のものが参考になった。
  - 3) ただし両者の思想は同じではないし、スピノザに対する態度も一様ではない。この点後述する。ヤコービのスピノザ主義に対する態度については、差し当たり平尾 [2006], [2007] や予定しているその続稿を参照されたい。
  - 4) この部分は、同年3月29日付けのリントナー宛書簡でもそのまま繰り返されている (HaB, II, 203)。

た著作はないし、彼の主要著作にもスピノザへの言及はほとんどないからである。ナドラー編集の批判版ハーマン全集 (HaW) でスピノザが登場するのは僅かであり、しかも、いずれもメモの類であって、一見して「本質的」な言及は見当たらない。スピノザ主義の研究においてハーマンが取り上げられることがない<sup>5)</sup>のも、ハーマンのスピノザ観を論じる論者が皆無と言ってよい状態である<sup>6)</sup>のも不思議ではない。ナドラーも、「ハーマンはスピノザとは何の関係もなく、晩年になって初めて、ヤコービを介してスピノザに取り組んだ」のだと注記している<sup>7)</sup>。しかし、ナドラーの強調点は知らず、ハーマン晩年のスピノザとの取り組みは、われわれにとって貴重な記録になろう。

汎神論論争からおおよそ30年後、既にハーマンが世を去って久しい時期、ヤコービ自身が編集に携わった『ヤコービ著作集』が刊行されることになる。問題の書『スピノザ書簡』の初版と第二版は、この著作集第四巻の第一分冊、第二分冊として刊行されることになるが、これには更に第三分冊が付されている。その中身が「ヤコービとハーマンの往復書簡」である。編集を担当したのは、さらにこの後に初めてのハーマン著作集——ヘーゲルの名高い、同時にハーマン研究者にとって厄介な「ハーマン書評」はこれについてのものである——の編集を手掛けることになるフリードリヒ・ロートである。この文書が、『スピノザ書簡』のいわば補遺であるかのような形で『ヤコービ著作集』に組み込まれたのは、この「ハーマン-ヤコービ往復書簡」が時期的に言って、『スピノザ書簡』刊行の年から汎神論論争の余波の時期に重なるからである。この時期はハーマンにとっては最晩年に当り、往復書簡は1788年まで、すなわち彼の死の年にまで至っている。

ハーマンの「高揚した精神の動き」<sup>8)</sup>を現出させているこの往復書簡は、編者ロートが述べているように、多くの話題に溢れている (JW, IV-3, S. III-IV)。しかし、特にハーマンに即して見れば、彼の晩年に起った汎神論論争とヤコービとの交流の結果として、著作の形こそとらなかったものの、膨大な書簡を残すことになった。そして、そこには当然ス

5) Timm, [1974], Bell[1984], Rüdiger[1994]など代表的諸研究でも取り上げられていない。

6) ハーマン研究の文脈でもハーマンとスピノザの関係研究の蓄積はほとんどない。浅見の範囲で唯一のものは、ハーマン研究者のバイヤーによるもの (Bayer[2002]) であったが、この短い論文は、ハーマンのスピノザとの関係が哲学的なものでなかったとして、スピノザ主義に帰せられる「ヘン・カイ・パン」と、いわゆる旧約聖書外典中の一書『ベン＝シラの知恵』にある句「主はすべてなり」(43章27節) との関係に絞る、そこからハーマンのキリスト論に触れるだけである。18世紀のスピノザ主義についての論集中のものとしては、親切な論文とは言い難い。

7) Nadler[1957], S. 363.

8) Henkel[1965], S. VIII.

スピノザが問題の一つの焦点として現れてきている。われわれの関心はそこにある。

ただし、この書簡集は、この期の往復書簡全てを収めたものではない。数にして半分強に留まる。特にヤコービの手紙は収録分が少なく、収められている場合でもほとんどが抜粋に留められている<sup>9)</sup>。つまり、往復書簡と銘打たれているものの、そのほとんど、分量的にはほぼ8割はハーマンの書簡なのである。その中でハーマンは、少なくともスピノザそのものに立ち向かおうとしており、その点でハーマンのスピノザ観を見る格好の素材であるとともに、著作集での位置付けからしても<sup>10)</sup>、われわれにとってはスピノザ主義の受容史上の興味深い事例を提供してくれている。ヤコービのスピノザについての見方や汎神論論争における彼の態度とハーマンのそれとを対比するのも役立つだろう<sup>11)</sup>。

しかし、われわれはまずハーマンの書簡に現れるスピノザについての記述を概覧することから始めよう。

## ハーマンのスピノザとの格闘

ヤコービの『スピノザ書簡』は1785年の9月に刊行される。この往復書簡に収録されて

- 
- 9) 1783年以降、二人の書簡のやり取りは、ハーマンからが98通、ヤコービからが86通、合計184通である。そのうち、著作集に収録されたのが合計114通で、ハーマン73通、ヤコービ34通である。
- 10) より完備したテキスト (HaB, JB) が存在するにも関わらず、ここでの引用をJWから行うのは、この文書のこうした歴史的な意味を鑑みたためである。また、この巻は往復書簡であり、名宛人の名前は全てヤコービであるから、省略する。ただし、JW所載のテキストは断わりなしの割愛も多く、信頼できるテキストではない。両者の書簡を改めてまとめ直したHJBもあるが、出版が古く、現在普及しているとは言い難い上、やはり完全ではない。HaB, JBをも並記する煩瑣を採ったのはこうした事情のためである。ただしJBは、残念なことに現在、重要な部分が未刊である。その意味では、現在において最もまとまったものはHaBになる。
- 11) ハーマンのスピノザ観をどう見るかは、ハーマンにとってのヤコービの重みをどう捉えるかにも関わる。バイヤー [2003]は残念ながらスピノザとの関係についてはほとんど触れていないが、これはハーマンとヤコービとの関係を取り上げていないことと関連がある。Unger [1968]はハーマンとスピノザとの関係についても簡潔に触れてはいる (I Bd., S. 444-447) が、ヤコービ及び汎神論論争との関わりにおいてのみであり、この点ではGildemeister [1868]も同じである。この往復書簡を重視しているのは、後に触れるように磯江 [1999]である。他に、ハーマンとヤコービの思想について論じたMilbank [1998]が一部スピノザを巡る両者の差異について触れている。更に視点を広くとれば、ハーマンが後の世代、特にヘルダーに与えた影響を介して、間接的にスピノザとハーマンの関係を論じている場合がある。例えば、Korff [1966] Bd. I, 2te kap.を参照 (特にS. 106-115.)。

いるのは、それに先立つ同年1月のものからである。既にこの時点からハーマンのスピノザへの挑戦は始まっている。それを「挑戦」と表現せざるを得ないのは、率直なハーマンの口から、『エチカ』読解に苦勞していることが繰り返し語られているからである。

ハーマンは、独訳<sup>12)</sup>と対比しもしながら(JW, IV-3, 42<sup>13)</sup>、またヤコービの教えも受けながら『エチカ』を読む。しかしその読解の困難さに加えて、自身の体調のよくないこと(JW, IV-3, 47-8<sup>14)</sup>)が再三言いつつに言及される。もう一度改めてスピノザに取り組んでいる(JW, IV-3, 71<sup>15)</sup>)。自分の著作が終わったら、君のスピノザ小冊子に向かうつもりだ(JW, IV-3, 89<sup>16)</sup>)。ハーマンは繰り返しそう語り、しかし、その都度跳ね返される。

この間の都合3年半、途中でスピノザについての言及が稀になる時期があるが、それは汎神論論争が進展し、ヤコービの『スピノザ書簡』が出版され、やがてメンデルスゾーンが世を去り、といった事件が続くからである。ドイツ後期啓蒙の本拠ベルリンの動向に気を配るハーマンであるゆえ、これら事件の経過についての話題が増える分だけ、スピノザへの直接的な言及が減少しているのである。その中には、ハーマンが同じケーニヒスベルクに住むカントをしばしば訪れたこと、カントがヤコービの『スピノザ書簡』を評価していること(JW, IV-3, 82<sup>17)</sup>)、しかし、カントが「君の解釈もスピノザのテキストもよく分からないと告白した」(JW, IV-3, 88-89<sup>18)</sup>) ことなども触れられる。それに対してヤコービが、それは本当のことなのか、「私は純粹理性批判を改めて読んだのですが、この供述は詭弁を弄したものとしか考えられないのです」と返信し(JW, IV-3, 108<sup>19)</sup>)、ハーマンの方では「カントは私に、スピノザをちゃんと研究したことがないことを告白した。彼自身の体系に心が占められていて、他の体系にかかずらわる気も時間もないのだ」(JW, IV-3, 114<sup>20)</sup>)と報告するといった、歴史的に興味深い証言もある。こうした状況報告と重なりながら、ハーマンのスピノザへの挑戦と挫折の反復という苦闘は、実に彼の最晩年まで続く。

---

12) ハーマンはスピノザを独訳で読んでいる。シュミットによる独訳『エチカ』であろう。この独訳については、差し当っては平尾[2004a], [2004b], [近刊]を参照。

13) HaB, V, 405, JB, I-4, 63.

14) HaB, V, 440, JB, I-4, 97.

15) HaB, VI, 26, JB, I-4, 143.

16) HaB, VI, 103 JB, I-4, 216, 220.

17) HaB, VI, 77, JB, I-4, 192-193.

18) HaB, VI, 107, JB, I-4, 219-220.

19) HaB, VI, 146, JB, I-4, 249.

20) HaB, VI, 161, JB, I-4, 263-264.



例えば1786年7月の書簡。「私はまだスピノザについてあまり理解できておらず、ヘムスターホイスについてはなおさら、ヘムスターホイス宛のスピノザについての君の手紙<sup>21)</sup>も理解できない」(JW, IV-3, 280<sup>22)</sup>)。それにも関わらず、「11月、12月は君の本、スピノザの『エチカ』、そしてヘムスターホイスと『帰結』<sup>23)</sup>を読むことに決めてある」(JW, IV-3, 293<sup>24)</sup>)。これが同年10月末である。しかし、それでも読解は遅々として進まず、次第にハーマンはいら立ちを隠さなくなる。翌1787年4月には、その怒りはヤコービにも向けられる。ハーマンの目には、ヤコービですらスピノザに加担しているかに、あるいは少なくともスピノザを評価し過ぎているように見える。

「スピノザの眼鏡レンズは君の目にはおそらく磨き抜かれたものなのだろうが、それは不純な色付きガラスなのだ。」(JW, IV-3, 349<sup>25)</sup>)

この言葉は、スピノザがレンズを磨いて生計を立てたという「伝説」を踏まえたものであろうが、ハーマンらしい物言いである。更には、

「残念なのは、君がいまなおスピノザにかかざらわっており、デカルト的、カバラ主義的な夢遊病の哀れな道化——ライブニッツが彼の予定調和を遠ざけたはずのもの——を皆に触れて回っていることだ。」(JW, IV-3, 357<sup>26)</sup>)

われわれから見ればヤコービは明らかに反スピノザ主義者に見える。しかし、ハーマンの目にはヤコービはスピノザのスポークスマンに見えたのであろう<sup>27)</sup>。実際に結果としてそうなる。ヤコービはこの後のスピノザ受容に決定的な影響を与えたからである。ハーマンはその点は全く表立たないが、それが何故であるかは後で考えることにしよう。

しかし、それでもハーマンはスピノザを読むことを諦めず、かつ、またもや撥ね付けら

---

21) ヘムスターホイスは当時のオランダの哲学者で、疾風怒濤の文学者・思想家達と交流を持ち、ロマン派にも影響を与えた人物である。ハーマンがここで言っているのは、ヤコービが『スピノザ書簡』出版に際して組み込んだヘムスターホイス宛書簡(JW, IV-1, 123-162)のことであろう。

22) HaB, VI, 538, JB, I-5, 340.

23) Wizenmann, Thomas, Die Resultate der Jacobischen und Mendelssohnschen Philosophie, 1786のことであろう。ヴィツェンマンはヤコービに勧められてスピノザを読み始めた経緯がある。

24) HaB, VII, 28.

25) HaB, VII, 167.

26) HaB, VII, 175.

27) 同じく完全にスピノザに賛同しているわけでないヘルダーに向けても、やはりこう書いている。「あなたとヤコービはスピノザにあまりにも敬意を払い過ぎる。だから私はあなたたちいずれにも不満なのだ」(HaB, VII, 242, an Herder, 2/7/1787)。

れる。5月。「スピノザの『エチカ』の定義一があまりにむかつくので、その先に進むことができない」(JW, IV-3, 359<sup>28)</sup>)。同じ書簡では、スピノザを「理性と学問の強盗にして殺人者」と呼んでさえいる。それでも11月には「今月の13日にわれわれは、君のスピノザ小冊子についての最初の読書会を持った」(JW, IV-3, 389<sup>29)</sup>)とあり、しかし、翌1788年3月には、またもや『スピノザ書簡』に「あまりついていけなかった。スピノザとヘムスターホイスに手をつけるやいなや、途方にくれるのだ」(JW, IV-3, 401<sup>30)</sup>)。

こうして、ハーマン自身の口調からすれば、彼は遂にスピノザ哲学を理解することなく終わったことになる。しかし、理解できなかったに於ては、ハーマンの『エチカ』へのこだわりは異常である。そもそも、なぜハーマンは『エチカ』に固執したのか。そして、これほど延々とハーマンを悩ませたのはいったい何だったろうか。

## 文体・形式・メタ批判

端的に言って、スピノザに関するハーマンの論点は絞られており、ほぼ二点に尽きるように思われる。

一つは『エチカ』の幾何学的な叙述形式やそれに象徴される思考様式の問題である。ハーマンが『エチカ』に何度も挑戦し、何度も挫折した理由は、言うまでもなくスピノザ哲学が彼にとって受け入れ難いものであったからである。キリスト教ルター派に自身の活動の基盤を見出していたハーマンは、基本的にスピノザ主義を「根本的に狂信的な汎神論」(JW, IV-3, 42<sup>31)</sup>)と見ており、その点では、スピノザ主義を嫌悪する当時の思潮の枠を抜けるものではない。しかし、ハーマンが『エチカ』を読めなかったのはそればかりではない。何よりも『エチカ』が幾何学的叙述形式をとっていたからである。しかし、これは幾何学的形式が難解で読み難いものであるためでは必ずしもない。

『エチカ』の読み辛さや、その元凶とみなされる幾何学的形式については、その学問的な正確性を疑問視し批判するものから、抽象的な形式性を批判あるいは嫌悪する者に至るまで、批判者に事欠かない。しかし、ハーマンの場合には単純にそうした疑いや嫌悪に解消されないような視点がある。スピノザの体系の幾何学的な形式についての批判的な観点は、ハーマンにとって本質的である。『エチカ』がハーマンを拒んだのは、むしろ、『エチカ』

28) HaB, VII, 177.

29) HaB, VII, 340.

30) HaB, VII, 462.

31) HaB, V, 405, JB, I-4, 63.



の文体——敢えてそう表現するならば——がハーマンの思想であり文体であるものと全く対蹠的であったからである。ハイネのように『エチカ』の幾何学的形式を否定的に評価する者でも、確かに『エチカ』の殻は堅いが、その分だけ中身は豊穡なのだと評価する<sup>32)</sup>場合はあり得る。しかし、ヘーゲルをして「ハーマンの著作は独特の文体を有しているというより、ただただ文体によって存在するのである」<sup>33)</sup>と言わしめたハーマンである。彼にとってハイネのような『エチカ』評はあり得ない。この事態はハーマン自身の思想から直接由来するものであったし、また、この点こそハーマンがスピノザ主義の歴史において特異な位置を占める点の一つである。いわば、『エチカ』のような書物を読み得ないことそれ自体が彼の思想の表現なのである。ハーマンに即してみれば、ここには二つの論点がある。

一つには、「体系」についてのハーマンの批判的態度である。これがハーマンにとって本質的であるというのは、「紡ぎやその崇拜者スピノザには幾何学的建築様式は自然なのだろうか。われわれは全て体系家でありうるのだろうか」(HaB, II, 197)という言葉に見られたように、この観点がヤコービとのやり取り以前に遠く遡るものであるからである。ハーマンらしいことには、ここにはSpinozaと紡ぎ=Spinnenとの掛け言葉が見られる。これがわれわれの牽強付会でないならば<sup>34)</sup>、『空飛ぶビラ』の中の「体系を紡ぎのように、理論を鳥の巣のように構築する」(HaW, III, 401)といった表現からも、著作中で全くと言ってよいほどスピノザに言及することのないハーマンのスピノザ観をあぶり出すことができるかもしれない。また、スピノザと「紡ぎ」という組み合わせからは、スピノザが蜘蛛の喧嘩を楽しんだというエピソードも思い出される。Spinnenは「紡ぐこと」、Spinneは「蜘蛛」である。ハーマン最晩年、1788年の断片でも「祭壇の一角から蜘蛛はその妄想の糸を頼りに恵まれたアザミ (carduus benedictus) へと降りる」(HaB, IV, 460)と言われている。ここにもSpinneと、更にスピノザの名Benedictusが出てくる。ひょっとすると、ハーマンはスピノザと蜘蛛のエピソードを知っており、それもあってスピノザを「蜘蛛のように巣=体系を紡ぎ出す」者とイメージしたのかもしれない。これは確証出来ないが、文献学者たるハーマンなら十分可能性がある。こうしたイメージは現在でもスピノザ像を強く規定するものである<sup>35)</sup>。しかし、重要なことは、「体系」一般へのこうした批判的態度がハーマンに一貫しており、それこそがハーマンの思想の中心をなしているという点である。ハーマンはリントナーに宛てて「すぐに体系を作ろうとする性急さ、われわれの近代哲学の呪

32) Heine, Zur Geschichte der Religion u. Philosophie in Deutschland, in: Bd. VIII-1, S. 54.

33) Hegel, Hamann-Rezension, in: Bd. XVI, S. 133 (『ヘーゲル批評集』, 262頁) .

34) この点の示唆を与えてくれたのは、バイアー [2003], 53頁である。

35) 佐藤 [2004], カバー見返し参照。

わしいメカニズム」(HaB, I, 367)を指摘している<sup>36)</sup>。逆にハーマン自身の見解では、しばしば引かれるように、「われわれの思想は断片に過ぎない」(HaW, I, 299)のである。

だが、しかも、その断片は根のないものではない。「全てのものはローカルであり、個別的である」(HaB, III, 67, an Moser)。全ては自然と歴史に基づく。それを忘れ、隠蔽して、普遍的な体系を紡ぎ出そうとすることは、ハーマンにとって、根を持たない空虚な企てに過ぎない。だからこそハーマンは「『エチカ』はあまりに軽薄だ、だから私はこれが大嫌いなのだ」(JW, IV, 348<sup>37)</sup>)と言う。この浅薄さこそ、ハーマンが「言語と理性の純粹主義」と呼んでいたものに他ならない。

「君の問題は、言語と理性の純粹主義についての私のメタ批判の焦点であるはずだ。——というのは、スピノザとわれらがカントにおけるあらゆる暗闇への鍵を発見したと思うからだ。あるいは少なくとも、その匂いを嗅ぎ付けたと思うからだ。」(JW, IV-3, 81<sup>38)</sup>)

これが第二の点に繋がるだろう。周知のように、この「純粹主義」という語は、ハーマンの『メタ批判』、ヤコービとの往復書簡が始まる前年に書かれた草稿に現れる言葉である。ハーマンにとってカント哲学は、自然と歴史、経験と言葉を抹殺し、理性のみへと純化する「純粹主義(Purismus)」(HaW, II, 283-4.)の典型であった。これがハーマンの、極端に圧縮された、短いが名高いカント批判、カントの批判へのメタ批判の中心点であり、ハーマンの思想を貫く核心の一つであった。カントの理性批判は、それを語る言葉によって自ずから批判されることになる、とハーマンは考えている。逆にハーマン自身の文体が一見して晦渋きわまりないものであるのもこのことによる。しかし、こうした批判は単にカント哲学にだけ当てはまるのではない。言語と理性の「純粹主義」は、あらゆる哲学が多かれ少なかれ持つ傾向であり、ハーマンにとってはスピノザもカントとならぶその代表なのであって、スピノザの場合、その純粹主義の象徴が幾何学的形式である。

「私の眼には、数学的形式へのスピノザの妄信はまやかしであり、きわめて非哲学的なペテンである。定義と公理[を合わせた]15個の研究で『エチカ』第一部全体はひっくり返る。」(JW, IV-3, 89<sup>39)</sup>)

ハーマンがそう言い得たのも、「数学の必当然の確実性は浅薄さに基づく」(HaW, II, 285.)とする『メタ批判』の立場の延長上においてであろう。

36) これは1759年の書簡であり、この年はウンガーがハーマンのスピノザとの出会いがあった年と推測していたものであった。Unger[1968], Bd. II, S. 773 (Anm. 1044) .

37) HaB, VII, 166.

38) HaB, VI, 75, JB, I-4, 190-191.

39) HaB, VI, 107-8, JB, I-4, 220.

## 反自然としての自己原因

ヤコービはスピノザ主義を哲学の典型として見ていた。しかし、ハーマンはヤコービと違って、『エチカ』の幾何学的形式に幻惑されることなく、それが幾何学的であるゆえに学問的であるといった見方に与することを拒む。同じ書簡のこの後の部分には、その点が、すなわち、上に触れたような「言語と理性の純粹主義へのメタ批判」が明確に打ち出されている。つまり、ハーマンにとって、スピノザはカントとともにメタ批判の対象となるのである。この二つ、すなわち、ハーマンのスピノザの体系への批判的視点と、同じくハーマンのカントへのメタ批判は、このように時期的内容的にぴったりと重なっている。

しかし、ハーマンにはもう一つ興味深い点がある。ハーマンがスピノザの「自己原因」の概念にこだわっていることである。例えば次のように言われている。

「スピノザの第一の定式、自己原因には、言葉合わせの完全な誤謬がある。相關語は本性上、その対応物なしには絶対的なものとは考えられない。したがって、自己(結果)原因は自己(原因)結果である。自分自身の息子である父、彼自身の父である息子。自然全体にそんな例があろうか。したがってスピノザ主義は自然に反する考えであり、それによれば同時に原因であり結果である唯一の実体しかない想定されている。」(JW, IV-3, 20<sup>40)</sup>)

ハーマンはなかなか『エチカ』に入ってゆけないことを嘆いていた。そのため彼が言及するのは必然的に『エチカ』第一部冒頭、特にその定義1、すなわち自己原因の定義ということになる。しかし、ハーマンには自己原因にこだわらざるを得ない別の理由、それを「自然に反する」と言わざるを得ない理由があったように思われる。

「人々は理性について語る。あたかもそれが現実の存在であるかのように。そして神を愛する、一つの概念と変わらぬものであるかのように。スピノザは一つの客体、自己原因について語る。カントは一つの主体、自己原因について語る。こうした誤解が取り除かれないうちは、理解し合うことは不可能である。」(JW, IV-3, 291-2<sup>41)</sup>)

ここでもハーマンはスピノザをカントと合わせて考えている。あるいは、スピノザとカントを明確に一種の対として捉えている。ハーマンがここで「カントの主体、自己原因」というのはカントでは自律に当ろう。カントの超越論的な観念論の立場からすれば、彼自

---

40) HaB, VI, 326, JB, I-4, 23.

41) HaB, VII, 26.

身の「自律」は、スピノザの「自己原因」とは全く異なったものである。観念論の立場から見れば、スピノザの実体は物ないし客体であり、そこに自己回帰的反省的構造はない。むしろ、自己原因と呼ばれ得るような構造は、超越論的観念論の立場によってこそ表現されねばならない。しかし、上のハーマンの言葉からすれば、スピノザの自己原因が「自然に反する考え」であったように、カントの考えもまた不自然なものであることになろう。実際、ハーマンにとってこの点は本質的な論点である。ハーマンは、無論、カントの理性批判に対して高い評価を与えている。しかし、批判されるべき理性が、自らを批判することにおいて、いわば自己神格化することを、あるいは自らの根を隠蔽することをハーマンは欺瞞だとする。しかしスピノザの場合には、その自己原因の概念は、同じ欺瞞であっても理性の自己吟味すら経ていない。ハーマンの評価はその意味では、カントに対しては両義的であるが、スピノザに対しては一義的で揺らぎが無い。

### ハーマンにおける〈カントとスピノザ〉

しかし、哲学史はハーマンの志向した方向には進まなかった。カント的な理性の自律は、デカルトにおける近代自我の確立を受け、更に後にフィヒテがそれを自我の自己定立として展開し、そこからドイツ観念論という巨大な運動が生じるというのが哲学史の描くところである。その意味では、ハーマンの思想は、その流れの傍流に留まらざるを得なかった。自身の書いたものを全て「紙くず」と見なしていたハーマンにとって、それも問題ではなかったにしても。ハーマンが20世紀における言語論的転回に繋がる先駆性を持つものとして評価を受けるようになるのは最近のことである。

しかし同時に、そうした主流からの距離の故に、ハーマンにのみ見えていたものがあるように思われる。実際、単純に見ても、カントとスピノザを対置するハーマンの上の見方は、磯江が言うように、「あたかもフィヒテの主観主義と客観主義の問題意識を予感するかのよう」<sup>42)</sup>である。フィヒテの観念論とスピノザの実在論、前者の自我と後者の実体を対として捉えること。これはフィヒテ以降にはスピノザ主義を捉える場合の、陳腐とも言える基本パターンとなる<sup>43)</sup>。しかしハーマンのこの時点ではまだフィヒテは登場していない。ハーマンはそれをカントとスピノザの対で考えているが、後の流れを、構図そのものとしては既に指摘していることになる。ただし、これには二つの注意点がある。

42) 磯江[1999], 120頁。

43) この点、平尾[2006]で触れたが、別稿をも用意している（脱稿済未発表）。

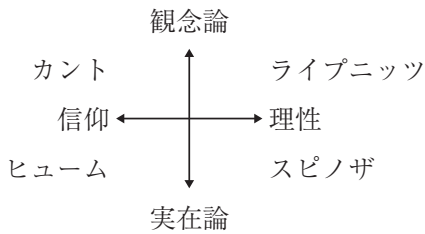
一つにはそれが〈フィヒテ対スピノザ〉を先取りするような構図であるにも関わらず、しかし、後の思想家たちとは違って、ハーマンの場合には〈カント対スピノザ〉は必ずしも生産的な構図ではないということである。ハーマンはカントに対してもスピノザに対しても——とりわけスピノザについては全面的に——批判的であり、したがって、両者を総合して新しい立場を考えるという志向はないし、そもそも独自の体系構築を志向もしていない。むしろ、そうしないことがハーマンの意図なのだと述べた方がよいかもしれない。ただし、ハーマンは次のように言っている。

「信仰は理性を、理性が信仰を必要とするのと同じく必要とする。哲学は観念論と実在論から成る。われわれの本性が身体と魂から成るように。観念論と実在論を分けるのは学校理性のみである。」(JW, IV-3, 347)<sup>44)</sup>

こうした見方は、後のロマン派やドイツ観念論において改めて登場することになるだろう。例えばシェリングの『自由論』は——この著作にはハーマンからの引用があり、スピノザへの批判があり、幾何学のような「死に沈む学」への批判がある——「観念論は哲学の魂である。実在論はその身体である。両者を合わせて始めて、一つの生きた全体を形成する」(SW, VII, 356)と言う。しかし、後のドイツ観念論におけるのとはやや事情が異なるのは、ヤコービ、ハーマンにおいては、彼らがそこから積極的体系構築に乗り出すことをしないという傾向に加えて、思想史的に見れば、ヒュームが決定的な役割を果たしていることである。むしろこのリストにはカントも加わってくるだろう。ハーマンは、上の引用の前で、「ヒューム：カント：ライプニッツ：スピノザ」という図を描き、ヒュームとスピノザ、カントとライプニッツを線で結んでいる(HaB, VII, 165<sup>45)</sup>)。これが何を意味するかは必ずしも定かではないが、この前後の言葉からすれば、おそらくは、信仰と理性、観念論と実在論を組み合わせることによって作られた構図であろう。すなわち、ヒュームは信仰＝実在論であり、カントは信仰＝観念論、ライプニッツは理性＝観念論、スピノザは理性＝実在論、ということなのであろう。この理解が正しいとすれば、スピノザは理性においてライプニッツと、実在論において——ハーマンが線で結んだように——ヒュームと重なる。しかし、カントとスピノザは、この二つの基準の二つながらにおいて一致することのない対極であることになる。だとすれば、ハーマンはこの四人を直線上に並べているが、補助線を汲み取って表現し直せば、平面で書くのが正しいことになろう。

44) HaB, VII, 165.

45) この部分はJWでは割愛されている。



しかし、ハーマンが〈スピノザ対カント〉という構図を見出したのは、それ自体が興味深い。なぜなら、カントの影響下にあった思想家たちにとって、カントの批判哲学は従来の哲学を決定的に乗り越えたものであるから、スピノザとカントを並べるといふ発想にならないからである。彼らにとってはカントこそ自分達の時代の思想の英雄であるに対して、スピノザは既に過去の乗り越えられた存在でしかない<sup>46)</sup>。逆にこの時代にスピノザ主義を評価していたゲーテやヘルダーは、それぞれにカントへの関心は持ちながら、そのことをスピノザと結びつけることはしていない。スピノザ主義が哲学の世界において主流に躍り出るのは、更に後の世代、シェリング、ヘーゲルの世代まで待たねばならない。しかしハーマンの場合には、カントに対して批判的な態度を採っており、そのためにスピノザとカントに対して同じ距離感で接しているのである<sup>47)</sup>。

## ハーマンとヤコービ

ヤコービの中にも〈カントとスピノザ〉という対がないではない。しかし、この対が本格的に取り上げられるようになるのは、汎神論論争の時期よりも後のことであり、またそこで問題になるのはカントの後継者たるフィヒテとスピノザとの対である<sup>48)</sup>。むしろ、ヤコービにとって汎神論論争時点で重要だったのは——啓蒙批判のコンテクストにおいては特に——スピノザとライプニッツの同一性であった<sup>49)</sup>。しかし逆に、ドイツのスピノザ受容に決定的であったライプニッツの影が、ハーマンのスピノザ理解には比較的薄い。むろ

46) 時代的にやや後になるが、例えばハイデンライヒなどはこの範疇に入ると言ってもよいだろう。ハイデンライヒについてはGawoll[2002]を参照。平尾[近刊]も参照されたい。

47) この点、ハーマンは最初はそう考えていなかったことは後に触れる。

48) 例えば、「カントによって、彼の意図に全く反して、第二のスピノザ主義が、すなわち私が他のところでein verklaerten Spinozismusと呼んだものの土台が与えられた」と言われている(JW, III, 432)。「他の箇所」とは、『フィヒテ宛書簡』のこと。

49) この点は平尾[2006]で示した。



んハーマンはライプニッツに対しても批判的な視点を持っており、ライプニッツ＝ヴォルフ学派に属するメンデルスゾーンにも批判的である。その延長上でハーマンは、「スピノザにおいて自己原因であるものを、ヴォルフ主義者は十分な原因と呼ぶ」とし、これがメンデルスゾーンの美学で用いられている点を指摘している（JB, I-4, 22<sup>50)</sup>）。しかし、スピノザ批判とライプニッツそのものに対する批判とは、ハーマンの中では、ほとんど重ならないか、もしくはとりたてて表立たせるほどの必要のないものである。こうした点に現れているように、ハーマンのスピノザへの態度は、盟友であるヤコービとは全く異なっている。〈スピノザとカント〉という構図を持つハーマンが一つの予感を示しているのに対して、〈スピノザとライプニッツ〉という構図を重視するヤコービは後ろ向きである。ハーマンは、始めから意図を持ってスピノザを読んでいるヤコービとは、見ているものが異なるのである。

ヤコービが後にとった戦略を考慮すれば、ヤコービにとってのスピノザ主義は、唯一の实体たる神即自然以外には「何も無い」という主張である点において、フィヒテらと同じくニヒリズムに陥っている（JW, III, 44<sup>51)</sup>）。それゆえヤコービは、自身は二元論ないし超越神論の立場を採る。対してハーマンはスピノザ主義がニヒリズムに至り着くなどと主張したいわけではない。ハーマンにとっては、世界は神なしには無にすぎないのであり（JW, IV-3,19<sup>52)</sup>, etc.），そうであった以上、ヤコービの議論には賛同できなかった。<sup>53)</sup>

しかし、例えばヘーゲルは後にこう言っている。

「はなはだ残念なことは、スピノザに対して示したヤコービの評価がハーマンには抜け落ちていたのである。たしかに、ヤコービの評価は、同時に、スピノザが樹立したのはただ整合的なだけの悟性哲学であったという否定的な意味を持つものではあったが、ハーマンは例のごとくそれをただ罵倒しているだけなのである。」<sup>54)</sup>

これも確かに的を射ている点がある。ハーマンはどうしても『エチカ』に入り込むことができない。ヤコービにとってスピノザ主義は、一面ではベルリン啓蒙への批判の武器であるのと同時に、他面、彼自身の「死の跳躍」のスプリングボードとして、戦略的な意味で決定的に重要であった。そうであればこそヤコービはドイツにおけるスピノザ受容に大

50) この部分は、JWでは割愛されている。

51) ヤコービの批判版全集（JG）をも参照したが、普及の程度を考慮してJWを用いておく（JGにはJWの頁数も示されていることもある）。

52) HaB, VI, 326, JB, I-4, 22.

53) Milbank[1998], S. 225-6.

54) Hegel, Bd. XVI, S. 182（訳文は『ヘーゲル批評集』, 331頁による）。

きな影響を及ぼすことになる。それに比してハーマンにとってスピノザは、何らかの役割を果たすようなものではなかったのである。少なくとも表面的には。ただし、これこそがハーマンの、いわば独自の立ち位置を示しているとも見ることができる。一般的に見れば、この時代までスピノザ主義とは「無神論」の別名でしかなかったし、それはヤコービにおいても変わらない。しかしハーマンにとっては、スピノザ主義は無神論者であるとしても、それだけが問題なのではない。スピノザについて一書をものしたヤコービとは違って、ハーマンのスピノザに関する発言はなるほどまとまったものではないし、「哲学的」な内容あるものとは見えないかもしれない。ヘーゲルの言うように罵倒しているに過ぎないように見えるかもしれない。しかし、言うならばそのことそのものが彼のスピノザ主義に対する姿勢を示しているのである。そして、ハーマンのスピノザについての発言の中には、たとえ詳細に展開されていないとしても、独自の視点が見られるのである。

例えばハーマンはスピノザの遺稿集の中では、「スピノザの形而上学的な部分よりも文献学的な部分の方がずっと重要だ——そして最も重要なのが政治的な部分だ」(JW, IV-3, 22<sup>55)</sup>)と明確に言っている。これはヤコービがスピノザの形而上学、神学に興味を集中させたのと対照的であり、両者の——そしてヤコービに影響を受けたドイツ観念論者たちとハーマンとの——決定的な違いである。哲学あるいは愛知よりも、文献学あるいは愛言学、そして言語が成立してくる政治的・歴史的世界こそハーマンの領域であった<sup>56)</sup>。

ハーマンがヤコービに見せたいら立ちは、単に自身がスピノザに入り込めなかったための八つ当たりと考えるべきではない。ハーマンは明らかにヤコービのスピノザへの固執そのものを理解しておらず、理解していたとしてもそれに批判的である。この点をよく示しているのは、1787年4月27日付けのヤコービ宛て書簡である(JW, IV-3, 347-351<sup>57)</sup>)。逆に、ハーマンのスピノザへの対し方は、ヤコービにとっては、意に添うものではなかったら

55) HaB, VI, 326, JB, I-4, 23.

56) ヤコービとの関係から、ハーマンはほとんど『エチカ』に集中しているが、スピノザが聖書の歴史を扱った『神学政治論』がハーマンの観点からどう読み得るかは別な興味ある問題である。そして、その問題系の一端を考える素材を提供してくれるのがハーマンの弟子にしてスピノザを重んじるヘルダーである。この点、Jacobs[1993]はスピノザ、ヘルダー、シェリングという歴史哲学の系譜を描いていて興味深い推定を行っているが、その検討は他日を期する。

57) HaB, VII, 161-170.ハーマンとヤコービの往復書簡のうち、この手紙のみは川中子義勝編訳『ハーマン著作選』上巻、沖積舎、2002年に訳出されているのを知り、本稿脱稿後に見ることが出来た。また、同下巻の詳しい訳注では、われわれが本文で取り上げた点も取り上げられているので参照されたい。

う<sup>58)</sup>。確かに、ハーマンとヤコービは、大きな思想傾向としては共通するものを持っていたとは言えよう。ヤコービが敵視した汎神論ないし無神論、自然主義といったものは、それこそが自分の若き日の『ソクラテス論』の標的だったのだと (HaB, VI, 276, JB, I-5, 67) ハーマンも言う。しかしながら、スピノザへの態度に関して言えば、明らかに異なっている。ハーマンのスピノザ観は、スピノザ主義の歴史において特異な一頁であり、その点では見逃せないものを含んでいるとともに、後の展開を予示するものではあった。しかしそれはヤコービの場合とは違って、それ自身が契機となって、後の世代に決定的な展開をもたらすようなものではなかった。あるとすれば、それは「予感」であり、可能性であったのである<sup>59)</sup>。

#### 一次文献[略記号]

- ◎Hamann, Johann Georg Hamann's Briefwechsel mit Friedrich Heinrich Jacobi, Hg. von Gildemeister, C. H., in: Johann Georg Hamann's, des Magnus im Norden, Leben und Schriften, Bd. V.[HJB]
- ◎Hamann, Briefwechsel, Hg. von Ziesemer, W. und Henkel, A, Insel, 1955-79.[HaB]
- ◎Hamann, Sämtliche Werke, Historisch-kritische Ausgabe, Hg. von Nadler, J., 1949-1957. [HaW]
- ◎Hegel, Gesammelte Werke, im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1968-, Felix Meiner. [Hegel]
- ◎ヘーゲル（海老沢善一訳編）『ヘーゲル批評集』梓出版社，1999年。
- ◎Heine, Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke, Hg. von Windfuhr, M., 1975-1997, Hoffmann und Campe.[Heine]

---

58) この往復書簡におけるヤコービ側の意図について言及出来なかったが、この点は、なぜハーマンがスピノザ主義に拘ったかの説明にもなる。その答の鍵は、ハーマンとヤコービの関係とともに、ヘルダーとヤコービに関係にある（脱稿済未発表）。

59) 本稿では紙幅の都合で述べられなかった点について、ここで簡単に補足しておきたい。スピノザ主義の歴史においては、この時代の哲学に決定的な展開を齎したカントとの関係が必ずしも明確ではない。本稿で示したハーマンのスピノザ観は、その点についての示唆を与えてくれるものであったが、他にカントとの関係を念頭においてスピノザ主義について論じているのは、先に触れたハイデンライヒ、そしてマイモン、更にその次の世代ではシュライアマハーがいる。中でも最も明確で哲学的に重要なマイモンについては、2010年6月27日、京都ユダヤ思想学会第三回大会（於京都大学）で口頭発表を行った。

- ◎Heydenreich, Karl Heinrich, Natur und Gott nach Spinoza, 1797, ND, Culture et Civilisation, 1973 (Aetas Kantiana ; 98) .[Heydenreich]
- ◎Jacobi, Werke, Hg. von Roth, F. u. Köppen, F., 1812-25.[JW]
- ◎Jacobi, Briefwechsel. Gesamtausgabe, Hg. von Brüggem, M. u. Sudhof, S., Frommann-Holzboog, 1981-.[JB]
- ◎Jacobi, Werke. Gesamtausgabe, Hg. von Hammacher, K. u. Jaeschke, W., Frommann-Holzboog, 1998-.[JG]
- ◎Schelling, Sämtliche Werke, Hg. von Schelling, K. F. A., 1856-61.[SW].

## 二次文献

- ◎Bayer, O. (Hg.) [1998], Johan Georg Hamann, Attenpto.
- ◎Bayer, O.[2002], Spinoza im Gespräch zwischen Hamann und Jacobi, in: Schürmann, Waszek und Weinrich (Hg.) [2002].
- ◎バイヤー, オスヴァルト (宮谷尚美訳) [2003] 『ヨーハン・ゲオルク・ハーマン——根元的な啓蒙を目指して』 教文館.
- ◎Bell, D.[1984], Spinoza in Germany, University of London.
- ◎Gawoll, H.-J.[2002], Karl Heinrich Heydenreich: Spinozismus als Metaphysik und Vernunftglaube, in: Schürmann, Waszek und Weinreich (Hg.) .
- ◎Gildemeister, C. H.[1868], Vorwort, in: HJB.
- ◎Henkel,A.[1965], Einleitung, in: HaB, Bd. V.
- ◎平尾昌宏[2004a] 「啓蒙期ドイツのスピノザ主義」スピノザ協会『スピノザーナ』5号.
- ◎平尾昌宏[2004b] 「形式・体系・自然——シェリング『叙述』とスピノザ『エチカ』」松山壽一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』 晃洋書房.
- ◎平尾昌宏[2006] 「ドイツにおけるスピノザ主義の基本構図」『大阪産業大学論集』（人文科学編）121号.
- ◎平尾昌宏[2007] 「スピノザ主義を巡るシェリングとヤコービの対話——「自由論」序論部の読解」スピノザ協会編『スピノザーナ』第8号.
- ◎平尾昌宏[2009] 「シェリングと無世界論——『自由論』序論部におけるスピノザ観への一評注」大阪産業大学学会編『大阪産業大学論集』 人文・社会科学編, 5号.
- ◎平尾昌宏[近刊] 「メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈」『スピノザーナ』.
- ◎磯江景孜[1999] 『ハーマンの理性批判』 世界思想社.

- ◎Jacobs, W. G.[1993], Gottesbegriff und Geschichtsphilosophie in der Sicht Schellings, Frommann-Holzboog.
- ◎Korff, H. A.[1966], Geist der Goethezeit, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, V Bde, 8. Auflage.
- ◎Milbank, J.[1998], Hamann und Jacobi, in: Bayer (Hg.) .
- ◎Nadler, J.[1957], Der Schlüssel, in: HaW, Bd. VI.
- ◎Rüdiger, O.[1994], Studien zur Spinozarezeption in Deutschland im 18. Jahrhunderts, Peter Lang.
- ◎佐藤一郎[2004]『個と無限——スピノザ雑考』風行社.
- ◎Schürmann, E. Waszek, N. und Weinreich, F. (Hg.) [2002], Spinoza im Deutschland des achtzehnten Jahrhunderts, Frommann-Holzboog.
- ◎Timm, H.[1974], Gott und die Freiheit, Vittorio Klostermann.
- ◎Unger, R.[1968], Hamann und die Aufklärung, 4te, Max Niemeyer (1te, 1911) .

[付注] 脱稿後、幾つかの文献を見ることが出来た。川中子義勝[1996]『北の博士・ハーマン』沖積社では、最終章でハーマンのスピノザ観が取り上げられている。また、SpinozaとSpinneの語呂合わせはバーリン(奥波一秀訳)[1996]『北方の博士J. G. ハーマン』みすず書房(原著1993年)が指摘しているのを知った(28頁(注25))。Knoll, R.[1963] Johann Georg Hamann und Friedrich Heinrich Jacobi, C. Winterはハーマンとヤコービの交流に焦点を宛て、両者の対話の鍵の一つとしてヤコービの「スピノザ小冊子」を取り上げ(S. 33-56)、ハーマンのスピノザ観とメタクリティークの関係についても簡単に触れている。

